タイトル:『汐製菓会社の新作 74 フィナンシェ 3』

登場人物

- **汐（しお）**

30 代。汐製菓会社の社長。「面白きことも無き世を面白く」をモットーに、次々と奇想天外な菓子を発案する。楽観的で、常に大胆なアイデアを追い求める。

- **塩田（しおた）**

30 代。汐の秘書。理性的で冷静、慎重な性格。だが、実はお菓子好きで、汐の発案には内心感心することもあるが、常に暴走する汐を止めようと苦労している。

- **国内バイヤーたち、メディア関係者、外国バイヤーたち**

各種のお客さんやバイヤーとして登場。会話や試食会のシーンで、リアクション豊かにコメディ要素を強調する。

シーン 1：オフィスの朝 ― 新作発表の前兆（20 分）

（オフィスの中央には、試作中のフィナンシェが山積み。塩田は机でメモを取っているが、汐が無造作にフィナンシェを置いていく。）

塩田（困惑しながら）：

「社長…このフィナンシェの数、何ですか。もう机の上に置くスペースもないんですけど？」

汐（興奮気味に）：

「これだよ、これが我が汐製菓の未来を担う新商品！見てくれ、塩田！新作フィナンシェだ！しかもただのフィナンシェじゃないぞ！」

塩田（疲れた表情で、フィナンシェを持ち上げてじっくり観察する）：

「うーん…普通に見えますけど…。中に何が入ってるんですか？まさかまた変わったものを…」

汐（大きくうなずいて）：

「そう、今回は『蜂の子フィナンシェ』だ！蜂の子だぞ、これは革命だよ、塩田！今までの常識を覆す最高のお菓子だ！」

塩田（驚きつつ、少し引き気味に）：

「は、蜂の子って…あの、昆虫の蜂の幼虫ですか？食べられるんですか、それ…」

汐（大真面目に）：

「もちろん！タンパク質たっぷり、健康に良いんだ。それに、フィナンシェのバターの風味と合わさって最高の味になるに決まってる！これは間違いなくヒットだ。」

（汐は興奮しながら、フィナンシェを無造作に口に入れる。塩田はその様子を見て苦笑いする。）

塩田（内心で）：

（さすがにこれは…さすがに食べたくない。けど、社長があれだけ熱心だと…。）

（塩田は一瞬ためらうが、汐の期待に応えようとフィナンシェを一口食べる。）

塩田（目を見開いて）：

「…意外と、いけますね…。でも、蜂の子の食感が独特で…ちょっと癖が強いかも…。」

汐（満面の笑みで）：

「そうだろう！これが新しい時代の味だ！さぁ、次は試食会だ。国内バイヤーたちにこの革新的なフィナンシェを披露するぞ！」

シーン2：国内試食会 ― 反応の多様性と爆笑の渦（25分）

（試食会場。国内のバイヤーやメディア関係者が集まり、汐と塩田はテーブルの上に蜂の子フィナンシェをずらりと並べている。バイヤーたちは少し戸惑った表情でフィナンシェを見つめる。）

バイヤーA（首をかしげながら）：
「これは…フィナンシェですよね？でも、なんか普通と違うような…？」

汐（笑顔で自信満々に）：
「そうです、普通じゃないんです！こちらは『蜂の子フィナンシェ』。蜂の子が入った栄養満点のお菓子なんです！」

バイヤーB（驚いて）：
「は、蜂の子！？昆虫食ってことですか？」

汐：

「そう！最近、昆虫食が世界中で注目されていますよね？高タンパクでヘルシー、そして新しい味覚の可能性を広げる。これが次のトレンドです！」

バイヤーC（困惑しながら手に取る）：

「うーん、ちょっと怖いけど…試してみるしかないですね。」

（バイヤーたちは恐る恐るフィナンシェを一口食べる。しばらく沈黙が続くが、やがて驚きの表情に変わる。）

バイヤーA：

「…おおっ、意外といける！蜂の子のカリッとした食感がフィナンシェのしっとり感と合う！」

バイヤーB（笑顔で）：

「これは確かに面白いですね。新しい体験です。」

バイヤーC（少し困惑したまま）：

「まあ、話題にはなるかもしれませんけど…一般的にはどうなんだろう？」

（塩田は安堵しつつも不安げな表情で周囲を見回す。）

塩田（小声で）：

「なんだか思ったよりも好評ですね…。社長、次はどこで売るんですか？」

汐（自信満々に）：

「もちろん、次は世界進出だ！外国のバイヤーたちにこの新作を紹介するんだよ。彼らもこの新しい時代の味に驚くはずだ！」

シーン3：外国バイヤーとの商談 – 異文化交流と反応（25分）

（外国バイヤーとの商談会場。汐と塩田が自信満々に蜂の子フィナンシェを紹介し、バイヤ

ーたちは興味津々にフィナンシェを見つめるが、少し不安げでもある。）

外国バイヤーA（日本語で、片言のアクセント）：

「これが新しい日本のお菓子ですか？非常に…ユニークですね。」

汐（笑顔で）：

「そうです！蜂の子フィナンシェ。日本の伝統的な素材を使った、新しいフィナンシェです。」

外国バイヤーB（眉をひそめて）：

「蜂の子というのは、昆虫ですよね？本当に…食べられるんですか？」

汐（大真面目に）：

「もちろんです！とても栄養価が高いんです。プロテインが豊富で、しかも美味しいんですよ！」

（バイヤーたちは慎重にフィナンシェを手に取り、少しためらいながら口に運ぶ。）

外国バイヤーA（驚いて）：

「おおっ、これは…思ったよりも美味しいですね。食感がとても独特です。」

外国バイヤーB：

「確かに興味深いです。私たちの国でも健康志向の人々には受けるかもしれません。」

外国バイヤーC（困惑して）：

「うーん、ちょっと私には冒険的すぎるかも…。」

（塩田はその反応を聞きながら、やや緊張した表情を浮かべるが、汐は大満足。）

汐（誇らしげに）：

「ほら、塩田！これでまた世界に新たな風を吹かせたぞ！」

塩田（苦笑いしながら）：
「…でも、次のアイデアはもう少し無難なものにしてもらえると助かるんですが…。」

フィナーレ － 大成功のその後（15分）

（汐製菓のオフィス。蜂の子フィナンシェは国内外で大ヒットし、電話がひっきりなしに鳴っている。）

汐（興奮しながら）：
「大成功だ、塩田！見ろよ、電話が止まらない！次はどんな新作を作ろうか、考えるだけでワクワクするな！」

塩田（呆れ顔で）：
「社長、次こそは本当に普通のお菓子でお願いしますよ。もうこれ以上、私の胃が持たないですから…。」

汐（笑顔で考え込みながら）：

「普通か…それもいいけど、やっぱりちょっと冒険しようか。例えば、次はサソリフィナンシェとかどうだ？」

塩田（即座に）：

「それだけは本当にやめましょう！」

（観客の笑い声と共に、幕が閉じる。